

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00219

研究課題名（和文）環境社会問題に向き合う映像：3.11原発事故後を捉えるドキュメンタリーを事例に

研究課題名（英文）Moving Image Practices Confronting Socio-Ecological Issues: Documentaries on the Post-3/11 Situations

研究代表者

藤木 秀朗 (Hideaki, Fujiki)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90311711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、福島第一原子力発電所事故後の環境社会問題を扱ったドキュメンタリー映像作品とそれに関連する国内外のドキュメンタリー映像作品を次の7つの観点から調査し分析することを目的としてきた（申請当初の計画を多少更新した）。1新植民地主義、2エネルギー、3廃棄物、4公共圏/親密圏、5マイノリティ、6動物、7記憶である。このうち3、4、6については論文として発表した。2は学術誌に投稿し現在査読中である。5と7は調査を終えこれから論文の執筆に取り組むところである。1はいくつかの学会で口頭発表を行ってきており、今後書籍を出版する際に執筆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては主として3つの領域に貢献している。第1に、本研究は福島原発事故後のドキュメンタリーが環境問題にどう関係しているかを複数の観点から明らかにすることで、近年人文学全般で盛んになってきた環境人文学および環境批評研究（エコクリティシズム）の発展に寄与している。第2に、映像学でも環境問題に関する研究が増えてきたが、本研究は映像メディアならではの特徴を重視しつつ、同時に福島第一原発事故後という特別な文脈を踏まえた分析をおこなうことでこの領域の研究を推し進めた。第3に、日本や東アジアの地域研究にも寄与するように、福島第一原発事故後の問題を地方、国、グローバルの関係を考慮して考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to explore and analyze domestic and international documentary films dealing with environmental and social issues after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident from the following seven perspectives (the original plan for the application has slightly been updated). The seven aspects are: 1. neocolonialism, 2. energy, 3. waste, 4. public/intimate spheres 5. minorities, 6. animals, and 7. memory. Of these, 3, 4, and 6 have been published in journal articles; 2 has been submitted to a journal and is currently under review; 5 and 7 have been researched and are currently in the process of being written; 1 has been presented at several conferences and will be written in a book to be published.

研究分野：映像学、メディア研究、環境人文学

キーワード：ドキュメンタリー 環境問題 福島第一原発事故後 映像メディア

1. 研究開始当初の背景

本研究には、大きく分けて3つの学術的背景があった。

(1) 第1に、人文学全般(文学、哲学、歴史学、社会学、美学・美術史など)で環境問題への関心が高まり、環境批評研究(エコ・クリティシズム)が盛んになってきたという背景があった。1つには、近代における環境破壊は、人間の思考のあり方そのものがもとで生み出されてきたということが自覚され、そのことを芸術文化、文学、史料、思想、制度、メディアの検証を通して反省的に捉え直す必要が認識されてきていた。また、人々はメディアを通して環境問題を想像するので、人文学的な視点からのメディアに対する批判的検証が不可欠だということが認識されてきていた。

(2) 第2に、こうした人文学全般における傾向に呼応して、近年映像学でも環境批評的な研究が多数発表されるようになっていた。これらの研究は、文字媒体とは異なる映像メディアならではの固有の特徴を追求しているという点で共通している。それは、映像が、視聴覚的にわかりやく情報を伝えるという性質を持っていること、つまり単なる無機質な情報ではなく、情報を物語化し情動・感情を伴いながら伝える性質を持っていること、そしてそこには主題を含む物語設定や、カメラワーク、編集、セッティング、音声、CGIなどによる表現技法上の問題と可能性が見られることである。一方、原発問題についてはあまり研究がない中で、グローバルな流通の観点から原発に関する映画を考察したL. Lynch(2012)は、本研究にとって重要な示唆を与えた。しかし、このように世界的には映像学で環境批評的研究が盛んになっているにもかかわらず、日本についてはわずかな研究しかなかった。

(3) 第3の学術的背景として、福島第一原発事故後の状況を考察する環境批評的研究があった。英語圏ではこの課題に取り組んだり関心をもっていたりする研究者が多く、例えばアジア研究学会(Association for Asia Studies, AAS)では2012年以来毎年のようにこのテーマでセッションが企画されてきた。しかし、映像については、作品が災害後100本以上も発表されてきたにもかかわらず、研究は多くはなく、しかもこの問題に取り組んでいる日本の研究者は少なかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、福島第一原発事故が提起した環境社会問題を事例に上記の問いを探究することで、人が環境社会問題に向き合うためにドキュメンタリーはどのような役割を果たしてきたのか、その過程にはどのような課題があり、将来的にその課題を克服することによりどのような展望が開けてくるのかを明らかにすることであった。

この目的を達成するために次の問いを立てた。すなわち、福島第一原発事故が提起した環境社会問題に関して多数発表されてきたドキュメンタリー映像作品は①放射性物質のグローバル流通問題、②エネルギーと温暖化問題、③廃棄物について何をどのように表象してきたのか、そしてそれらのドキュメンタリーはどのように流通し上映され、社会に関わってきたのか、という問いである。本研究では、これらの問いを、過去に制作された環境問題に関するドキュメンタリーや、日本以外で制作された原発に関するドキュメンタリー作品も含めて考察することで、歴史的・国際的に位置づけることを目標とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために本研究は主として次の4つの方法を遂行した。

(1) 基礎的データの作成：福島第一原発事故後の環境社会問題とそれに関連するテーマを扱った映画とテレビのドキュメンタリー作品のデータベースを作成すること、また、国内外の環境映画祭と自主上映会のデータベースを作成すること。

(2) 関連の資料・文献の収集、読み込み、分析：(a)福島第一原発事故後の環境社会問題に関する資料・文献の収集、読み込み、分析。とくに、山形国際ドキュメンタリー映画祭 311 ドキュメンタリーフィルムアーカイブ、せんだいメディアテーク、放送ライブラリーでの資料収集、そのほかDVDやネット配信の映像を視聴し分析。(b)環境問題全般と、放射性物質のグローバル流通問題、エネルギーと温暖化問題、廃棄物問題に関する資料・文献の収集、読み込み。また環境批評研究、ドキュメンタリー映画研究に関する資料・文献の収集、読み込み、分析。

(3) 映画祭・自主上映会・関連展示・ミュージアムのフィールドワーク：(a) 国外の映画祭への参加と、プログラムの分析、会場の参与観察、関係者へのインタビュー。(b) 日本国内の映画祭への参加と、プログラムの分析、会場の参与観察、関係者へのインタビュー。具体的には、福島映像祭、山形国際ドキュメンタリー映画祭、グリーンイメージ国際環境映像祭でそれを行う。(c) 日本国内の自主上映会への参加や展示・ミュージアム訪問と、プログラムの分析、会場の参与観察、関係者へのインタビュー。

(4) 映像作品分析：(a) 分析方法は、映像学で培われてきた数々の映像分析（物語分析、視聴覚情報の供給プロセスの分析、情動分析、ランドスケープ分析など）の方法を組み合わせながら行う。(b) 放射性物質のグローバル流通問題、エネルギーと温暖化問題、廃棄物問題それぞれにとって重要な作品を2～3本に絞って詳細に分析。(c) 過去の作品や、国外の作品も含め上記それぞれに関連する作品の分析。

4. 研究成果

(1) 福島第一原発事故後の状況に関する映画の自主上映会

この成果については、下記2冊の図書、および1つの学会での口頭発表で発表してきた。内容的には、日本における「市民」概念の変化の歴史と映画の自主上映会の歴史の重なり合いを辿った上で、2011年3月の福島第一原子力発電所の事故後の状況をテーマにした映画の自主上映会が日本全国の各地で「市民」の主催により活発に行われた状況を論じた。より具体的には、そうした上映会が「親密-公共圏」と呼べるような場を形成し、上映会が参加者たちにとって同じ関心を共有できる場になるとともに、同じ関心を持つ人たちの、すなわち「市民」のネットワークを形成する上でのハブとしても機能していたことを明らかにした。またそうしたネットワークは映画以外の多種多様なメディアの間のネットワークをも形成しながら、原発のリスクを社会的に不利な立場にいる個人に押し付ける政治的・経済的なシステムに支えられた権力に対して、抵抗の一端を担う力ともなっていたことを示した。

(2) 福島第一原発事故後の動物の状況に関するドキュメンタリー

この成果については、下記2件の講演により発表してきた。またこの前段階になる論文を2017年に発表している。内容的には、原発事故後に製作された、風景と動物に関する4つの作品——『フクシマからの風 第1章 喪失あるいは蝨』（加藤鉄、2011）、『原発事故5年目の記録：前編 被ばくの森、後編 無人の町はいま』（NHK、2016）、『Zone 存在しな

かった命』(北田直俊、2013)、『福島 生きものの記録』3作(岩崎雅典、2013、2014、2015)——を比較分析しながら、それぞれが風景や動物を巡る状況を、反資本主義的、人間中心的、動物福利主義的、エコロジ的に媒介していることを論じた。これにより、人間中心主義的な媒介は動物を人間のための認識論の対象に還元する傾向があるのに対して、エコロジ的な媒介は逆に人間による動物の認識を存在論的な場の問題として前景化していることを指摘した。

(3) 放射性廃棄物(ゴミ)のグローバルな生産・流通に関するドキュメンタリー

この成果については、下記7件の学会・研究集会の口頭発表と、1つの論文で発表してきた。内容的には、環境映画批評の成果を批判的に検証しつつ、放射性廃棄物に関してドキュメンタリーはどのような倫理的かつグローバルな想像力を喚起し拡張してきたのかについて探究した。より具体的には、映像作品と、より広範囲にわたる間テクスト的・トランスメディア的な想像力の関係を考慮に入れた批判的分析モデルを提唱しつつ、放射性廃棄物の問題を照射した『チャルカ』(島田恵、2016)を、同じくこの種の廃棄物をテーマにした『100,000年後の安全』(*Into Eternity*, Michael Madsen, 2010)や『放射性廃棄物：終わりなき夢』(*Waste: Nuclear Nightmare*, Éric Guéret)と比較しながら分析した。それにより、『チャルカ』が、感傷的、啓蒙的、ナショナルな枠づけとも見て取れる側面を持ちつつも、ローカルとグローバルな関係を多層的に捉えながら、資本主義と植民地主義に規定されてきた近代自体を問い直すようなビジョンを見せている点で、放射性廃棄物にまつわる倫理的な想像力を拡張する可能性を示していることを指摘した。

(4) 原子力発電と再生エネルギーをめぐる問題をテーマにしたドキュメンタリー

この成果については、下記3件の研究集会や学会で口頭発表し、それらを基に執筆した論文をイギリスの学術雑誌に投稿した。現在、査読中である。内容的には、『ガイアのメッセージ』(太田洋昭、2017)と『おだやかな革命』(渡辺智史、2017)を比較検討し、前者が、ジェームズ・ラブロックが提唱する「ガイア」の概念を基調に地球全体の環境保全と原発の必要性を訴えるのに対して、後者は「コモンズ」の考え方を基調にその多様な実践例を示すことで、全体としての地球環境の保全よりも、社会関係、共同的な活動、相互理解、民主的合意を媒介するものとしての再生エネルギー技術を重視していることを明らかにした。口頭発表では、反原発を訴えながら再生エネルギーを推進している映画『日本と再生』(河合弘之、2017)も取り上げたが、これは、「コモンズ」よりも、国家戦略としての再生エネルギー技術を強調する点で『おだやかな革命』とは大きく異なっている点を指摘した。

(5) 福島第一原発事故後の状況をめぐる記憶の展示

これについてはまだ成果を発表していないが、共著書 *Brill's Handbook on Memory Studies in East Asia* の一つの章のために論考を執筆する予定である。これは、2024年2月に、いわき震災伝承みらい館、いわきミュウじあむ、リプルンふくしま、東京電力廃炉資料館、とみおかアーカイブ・ミュージアム、中間貯蔵工事情報センター、東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構浪江町立請戸小学校で行ったフィールドワークを基に、展示、映像、メディアが原発事故とその後の記憶をどう形成し媒介しているのか、そこにどのような問題があるのかを検証するものである。この検証と分析を、近年盛んになってきた記憶研究(メモリー・スタディーズ)の理論的成果と付き合いながら行う。

(6) 福島第一原発事故後の障がい者をめぐるドキュメンタリー

これについてもまだ成果を発表できていないが、近年盛んになってきた障がい研究(ディスアビリティ・スタディーズ)とマイノリティ研究に関する文献を読み込んできた。その成

果を考慮に入れながら、『架け橋 きこえなかった 3.11』(今村彩子、2013)、『きこえなかったあの日』(今村彩子、2021)、『逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者』(飯田基晴、東北関東大震災障害者救援本部、2012)、『生命のことづけ 死亡率2倍 障害のある人たちの3.11』(早瀬憲太郎、2013)などを分析する。学会発表にも応募し、現在その採択結果を待っているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 藤木秀朗	4. 巻 13
2. 論文標題 インスタレーションが触発する、語りによるつながり：せんだいメディアテーク「ナラティブの修復」展	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JunCture: 超域的日本文化研究	6. 最初と最後の頁 172-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/juncture.13.172	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤木秀朗	4. 巻 12
2. 論文標題 文化としてのゴミ 序	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JunCture	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤木秀朗	4. 巻 12
2. 論文標題 映画に媒介された放射性廃棄物 環境映像批評、グローバルな倫理的想像力、『チャルカ』（2017）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JunCture	6. 最初と最後の頁 84-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hideaki Fujiki	4. 巻 0
2. 論文標題 The Spectator as Subject and Agent	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese Cinema Book	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hideaki Fujiki and Alastair Phillips	4. 巻 -
2. 論文標題 Japanese Cinema and Its Multiple Perspectives	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japanese Cinema Book	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤木秀朗、アラスデア・フィリップス	4. 巻 11
2. 論文標題 序論 多様な観点からの日本映画	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JunCture: 超域的日本文化研究	6. 最初と最後の頁 74-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/juncture.11.74	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 16件)

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Ecologies of Energy: The Documentary in Ecological Imaginations
3. 学会等名 Visible Evidence Conference XXVIII (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Uncovering the Uneven Globe: Documentaries on Radioactive Disposal
3. 学会等名 Association for Cultural Studies: Crossroads 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki and Alexander Zahlten
2. 発表標題 Introduction
3. 学会等名 Screens and Energy Symposium (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Making Audiences: A Social History of Cinema and Media
3. 学会等名 Book Lunch Organized by Daiwa Anglo-Japanese Foundation and coordinated by Marcos Centeno in partnership with The Japan Research Center, SOAS, University of London (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Approaching Audiences as Social Subjects: The Case of Japanese Cinema in Historical Contingency
3. 学会等名 HoMER Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki, Alastair Phillips, and Jennifer Coates
2. 発表標題 Collaborations through Publication and Program Building
3. 学会等名 Conversations on the Current State of Japanese Film and Media Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Ecologies of Energy: Illuminating Cinema in Ecological Imaginations
3. 学会等名 The Symposium "Ecology and Media after Fukushima" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Disclosing the Uneven Globe: Documentary Imagination on Radioactive Waste and Ecology
3. 学会等名 Visual Evidence Conference XXVII (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Ecological Reality as Contesting Global Imaginations: Documentary on Radioactive Waste
3. 学会等名 Invited lecture by Justus-Liebig-University of Giessen, Germany (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki and Alastair Phillips
2. 発表標題 On The Japanese Cinema Book
3. 学会等名 Global Virtual Symposium, "Japanese Cinema from Multiple Perspectives" (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Mediating Animals in Post-3/11 Documentaries
3. 学会等名 Invited lecture. University of East Anglia, UK (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Global Imagination of Ontological Reality by Transnational Radioactive Documentaries
3. 学会等名 Seminar on Japanese Transnational Cinema, University of London Birkbeck Collage, UK (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 The Cinema Audience as Social Subjects in Transmedia and History
3. 学会等名 Invited lecture. Kyoto University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤木秀朗
2. 発表標題 トランスメディア的消費文化と帝国の総力戦
3. 学会等名 第39回平和のための京都の戦争展ミニシンポジウム (日本史研究会近現代史部会主催) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Making the Insensible Reality Sensible: Documentaries on Radiation in the Age of the Digital
3. 学会等名 Inter-Asia Cultural Studies Conference, Silliman University, Dumaguete, the Philippines (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤木秀朗
2. 発表標題 自然化された不均衡な地球 放射性廃棄物のドキュメンタリーの想像力
3. 学会等名 国際シンポジウム「文化としてのゴミ」(名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター主催)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Imagining the Uneven Globe: Documentaries on Radioactive Waste
3. 学会等名 Symposium "Imagining Post 3.11 Futures and Living with Anthropogenic Change. University of California, Berkeley, (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hideaki Fujiki
2. 発表標題 Mediating Animals and Place in Post-3/11 Japanese Documentaries
3. 学会等名 Invited Lecture. University of California, Santa Barbara (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Hideaki Fujiki	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 640
3. 書名 Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media	

1. 著者名 藤木秀朗	4. 発行年 2023年
2. 出版社 伊藤守(編) 東京大学出版会	5. 総ページ数 -
3. 書名 メディア論の冒険者たち	

1. 著者名 Hideaki Fujiki	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 635
3. 書名 Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media	

1. 著者名 Hideaki Fujiki and Alastair Phillips	4. 発行年 2020年
2. 出版社 British Film Institute	5. 総ページ数 604
3. 書名 The Japanese Cinema Book	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究会・関連イベント企画・司会 藤木秀朗（共同企画・司会）超域文化社会センター・名古屋大学未来社会創造機構FSS他共催「『おだやかな革命』上映会 + 対談会、於名古屋大学、2023年5月15日
Hideaki Fujiki and Alexander Zahlten. (Organizers and chair) Screens and Energy Symposium. Nagoya University, January 7, 2023.
藤木秀朗（企画）超域文化社会センター・国際シンポジウム「文化としてのゴミ/Waste as Culture, the Culture of Waste」、於名古屋大学、2020年1月25-26日
Hideaki Fujiki. (Organizer/Chair) "Exploring Environmental and Human Exploitation: The Media Politics of Global Ecology." International Conference on Environmental Humanities: Stories, Myth, and Arts to Envision a Change, Alcalá de Henares, Spain, July 3, 2018.

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------